

あつたてんがの

ある山の村に、ひとり者の若い馬方がいました。馬方は、毎日、朝早く起きて山へ行き、草を刈って来て馬に食べさせました。いつも、いい声で歌を歌いながら、草を刈りました。

ある晩のこと、馬方は、一日の仕事を終えて、家に帰って来ました。ひと休みしていると、美しい娘がやって来て、

「今夜ひと晩、泊めてくれませんか」とたのみました。馬方は、

「おれは、ひとり者で、ろくな飯も食べさせてやれないから、泊められん」と断りました。

娘は、

「なに、夕飯ぐらい、わたしがたくしますから、どうか泊めてください」といって、さつさとしたくをはじめました。おいしいご飯を作って、かたづけや掃除もしてくれました。そして、

「あなたは、ひとり者で不自由だろうから、どうか、わたしを嫁にしてください」といいました。

「そうか。あんたがいいのなら、どうぞ、おれの嫁になってくれ」
こうして、その晩から、ふたりは、夫婦になりました。

ある朝、馬方は、いつものように山から草を刈って帰って来ました。その草を、馬屋の床に投げこんで、ふと見ると、草の中に、月見草の花が一本まじっていました。馬方は、

「これはまた、きれいな花がまじっているな」といって拾い上げると、嫁さん呼びました。

「おうい、かか。かか。月見草のきれいな花があつたぞ。見てごらん」

けれども、いっこうに返事がありません。

「おうい、かか。かか。うちにいないのか」といって、探すと、嫁さんは流しのところに倒れていました。馬方が驚いて、かけよって、

「おまえ、どうした。どこか具合が悪いのか」ときくと、嫁さんは、細い声で、いいました。

「わたしは、あなたが今刈ってきた月見草です。じつは、毎朝、山であなたのいい声を聞かせてもらって、こないいい声の人の所に嫁に行きたいと思っていました。思いがかなって、こうして嫁にしまいました。けれども、刈られてしまえば、わたしの命もこれまでです。今まで、ありがたかった」

そういうと、嫁さんはそのまま消えてしまったということです。

いきがポーンとさけた